

校外で指導する場合があることも認めていきたいと思っています。

指導計画と学習評価の実施については、教育委員会に出す指導計画については、おおまかな内容、学校内で共有していく指導計画については、細かいものになります。具体的な記入例について、文科省で作成しておりますので、今後ホームページ等でみなさまに公表していく予定です。個別の指導計画や評価については、子どもたち1人1人の学習の成績だけを見るのではなくて、子どもたちが学習に参加しようとする意欲や態度についても、積極的に評価してくださいよということを書いています。

最後に、この制度を導入すると、学校や教育委員会は、それを基準として体制を作り始めます。そして、研修が始まっていきます。学校全体で、いろんな取り組みが始まるので、国全体

で徐々にですがこういった取り組みが、広がり始めることが期待されます。我々は一人でも多くの子どもが日本の学校で学んでいくことを選択して、卒業して、高校進学、就職というものに結びつけられればと思います。

ありがとうございました。

(編集 船山千恵)

この後、会場の中から、外国人児童生徒教育拠点校担当教員・研究者・日本語教室ボランティア・学生等、7人から質問を受け、それぞれの質問に対して、河村様に丁寧に応答いただきました。今回の依頼につきまして、お忙しいところご協力いただきました河村様とご理解いただきました文部科学省関係者の皆様に、この場をお借りいたしまして、HANDSプロジェクト一同、厚く御礼申し上げます。

第3部「北関東における外国人児童生徒教育に どのように向き合うか」

国際学部特任准教授

若林 秀樹

第3部は、「北関東における外国人児童生徒教育にどのように向き合うか」と題し、茨城県、群馬県そして栃木県の3県における取り組みが登壇者から発表されました。

茨城県からは、茨城大学人文学部人文コミュニケーション学科准教授の稲葉奈々子氏による、「進学格差対策」や「入試における特別措置の可能性」についての報告がされました。国勢調査の結果から集計した国籍別通学率によって、ブラジル・ペルー・フィリピン籍の進学率が他の国籍と比較して低いことが明確になったことや、格差対策の必要性について述べられました。群馬県からは、いせさきNPO協議会社会貢献ネットワーク理事の本堂晴生氏による、「NPO活動からのネットワーク作り」と題した、群馬県伊勢崎市



におけるNPOによる外国人児童生徒支援の実践についての報告がありました。学校現場に入り込んでの支援の他、不就学の子供に対する進学・就学へ向けての学習サポートなど、積極的な活動内容が伺え興味深いものでした。

栃木県からは私が登壇させていただき、主に HANDS プロジェクトの諸事業を通じた、県内の外国人児童生徒支援の実践について報告しました。県内全中学校に依頼して毎年実施している進路調査や、教育委員会担当者や学校長によって組織される「外国人児童生徒教育・グローバル教育推進協議会」など、教育現場との協力関係構築を大きな成果として報告しました。最後に、HANDS プロジェクト代表の宇都宮大学国際学部田巻松雄教授より、北関東3県が協力することの必要性や、今後の協力体制の重要性について意見が述べられました。

茨城県、栃木県、群馬県の北関東3県には、外国人を取り巻く状況（労働環境・国籍構成・児童生徒教育問題）について、いくつもの共通

点があるといわれています。したがって、情報を交換したりノウハウを共有したりできるネットワークが構築できたことは、課題の解決に向けた大きな前進と言えるでしょう。しかし、当の主役は大学機関や NPO 団体ではなく、悩みや問題を抱えた外国につながる子どもたちにほかなりません。構築されたネットワークは、その成果を主役の子どもたちに還元できた時に初めて、その意義が認められるものと考えています。待ったなしで成長してしまう子どもの言語・学習支援やキャリア形成を考えれば、北関東を見据えた HANDS プロジェクトとしての次のアクションが、早急に望まれるところかもしれません。

感想・意見等アンケートより(抜粋)

〈第1部について〉

- ・生の声が聞けて、刺激的だった。もっと時間を多くとっていいのではないかと感じた。(学生)
- ・外国につながるのある子どもたち、先輩(宇大生)の思いを会場の人たちと共有できたのは、とても良かった。(他大学研究者)
- ・HANDSプロジェクトの学生さんたちのがんばりに感激しました。(日本語教室ボランティア)

〈第2部について〉

- ・文科省より直接話を聞いたのが有意義であった。(小学校日本語教室担当教員)
- ・日本国籍で日本語指導が必要な児童数が多いのに驚きました。(学生)
- ・ちょっと消化不良でした。来年度からのことが不安になりました。(中学校外国人児童生徒教育拠点校担当教員)
- ・何事も新しくはじめるというのは難しいものだと思います。案ずるより産むが易しともいいますが、はじまって色々悩みながらだんだんと定着していくのでしょうか。生活科しかり、外国語活動

しかり…。(小学校日本語教室担当教員)

- ・疑問が残りましたが、文科省の担当者が今日来てくれたことと特別の教育過程における日本語指導が開始されることは、大きな第一歩だと思いました。(通訳、ボランティア)

〈第3部について〉

- ・本堂さんのお話を聞いて、「学校だけ」でできることには限界があるな、と改めて思いました。外国につながる子どもたちは、家に帰ってからもサポートを必要としています。そこを何とか補えないだろうか、と思いました。(小学校日本語教室担当教員)
- ・進学率・貧困・ネットワークといったキーワードを元に、問題の大きさを実感しました。(学生)
- ・外国につながる子どもを取り巻く厳しい環境、また周りの日本人も外国とともに生きていくための課題など、社会が抱えている問題について気づくことができた。(小学校日本語教室担当教員)
- ・今まで目を向けなかったサイドからの外国人の